



編集：安齋育郎、山根和代

翻訳者：赤松敦子、狩俣英美、寺沢京子、山根和代、山本美穂子、山本桃子

ベトナム戦争証跡博物館での 平和運動展ホーチン市

アメリカのベトナム戦争（1965-1975）の間に、何万人もの米兵と退役軍人が戦争に反対しました。彼らは行進し、戦いを拒否し、脱走しました。彼らは、この不当な戦争について真実を伝えている数十万の地下新聞に記事を書いて配布しました。平和運動展は最初 3 月 19 日から 4 月 15 日までホー・チ・ミン市の戦争証跡博物館で開催され、このあまり知られていない歴史を記録し、広めています。（また、2 ページの記事も参照してください）ワシントン DC の政策研究所（Institute for Policy Studies）の研究員で展示会を担当したロン・カーバー氏（Ron Carver）は、展示物を収集するのに 1 年以上かかりました。この展示会の初日に出席した INMP 理事のロイ・タマシロ氏（Roy Tamashiro）は、ウィリアム・ショートとウィラ・セイデンベルクの 2 つの展示会、すなわち「良心の問題：ベトナム戦争中のアメリカ兵の抵抗とベトナムからの物語」との類似性に気づきました。というの

は、それは 2017 年 4 月にベルファストで開催された第 9 回国際平和博物館国際会議のワークショップで発表されたからです。彼らの平和運動への貢献は、大いに感謝されています。



戦争残骸博物館で写真、ポスター、記事を見る訪問者（写真：ベトナム通信社）

カーバー氏は博物館のディレクターのフイン・ノック・ヴァン（Huynh Ngoc Van）館長との出会いで、展示会を行うよう求められました。この展示会は、博物館と「平和のための米国退役軍人」および、市の平和・開発基金、友好組織連合の協力のもとで行われました。両国の外交関係が正常化してから 20 年

後、多くのアメリカ退役軍人が和解、戦争傷害の癒し、人道活動への参加のためにベトナムに戻りました。（展示会は、ソンミ村の虐殺（1968年3月16日）50周年記念とパリ協定（1973年1月27日）の45周年記念行事の一環でした。この展示会はまた5月2日から6月18日まで米国のノートルダム大学で開催されました。

スライドショーや戦争証跡博物館の14分間のビデオを含むこの展示の詳細については、[ここをクリックしてください](#)。さまざまな新聞での展示会の報道も参照してください。例えば、[VN Express](#)（ベトナムで最も読まれている新聞）、[The Guardian](#)（英国）です。[ウィリアム・ショートの写真集](#)もご覧ください。

読者の皆さんはまた、キム・ホン・ニュエン（Kim Hong Nguyen）の「植民地独立後の戦争博物館：ベトナム戦争証跡博物館で戦争と植民地主義展を企画する」という記事（[Interventions](#) Vol. 19, No. 3 掲載）に興味を持つかもしれません。カナダ、ワーテルロー大学のスピーチコミュニケーションの助教授である著者の目的は、「ベトナムの歴史についての主張の正確さを判断するのではなく、植民地独立後の戦争博物館のレトリックを分析することであり、国家的アイデンティティーが修辭的表現によってどのように表現され

ているかを考察することなのです」と述べています。

（翻訳：山根和代）

ベトナム、ホー・チ・ミン市における一連の平和のための活動

ホー・チ・ミン市平和促進財団
(Ho Chi Minh City Peace and
Development Foundation: HPDF)



時事通信が報じた1966年にベトナム派遣を拒否した米兵「3番基地支部」

ホー・チ・ミン市平和促進財団（HPDF）は、とりわけ、ベトナム戦争時のアメリカ国内における反戦運動のような若い市民たちの平和に対する意識を向上させ、現代における平和の価値を尊重し、次世代に向けて平和を守る責任を果たすために、市内の戦争証跡博物館（INMPメンバー）を含む他団体と協力し、「平和のための活動」

というテーマでシリーズ・イベントを開催しました。

3月18日、HPDFとソウル・ミュージック&パフォーマンス・アート・アカデミーは、アメリカのコニー・フィールド（Connie Field）監督の「The Whistle Blower of My Lai（マイライの告発者）」というドキュメンタリー映画を初めて公開上映を共催しました。本作はオペラ版を下敷きにした長編作品であり、多くの非戦闘員ベトナム人が犠牲となったマイライの大虐殺の悲劇を、大量虐殺阻止のために果敢に奔走して世論に訴え、この犯罪を断固として非難したアメリカ軍のヒュー・トンプソン（Hugh Thompson）少佐の視点から描いたものです。

3月19日、オープニング・イベントとして「平和のための活動：ベトナムにおけるアメリカの戦争に反対した米兵と退役軍人」と題された特別展示が行われ、米兵や退役軍人による反戦キャンペーンに関する80枚ものポスターや写真、新聞記事などが展示されました。

この展示は、アメリカ軍人および退役軍人がベトナム侵略戦争中に果たした反戦の役割や、戦争の結果を克服して今日のベトナムを再建、発展させることに貢献した退役軍人の努力（詳しくは上記の記事参照）について、ベトナム人も海外からの旅行者もより詳細に学べる機会となりました。

3月20日には、ベトナムとアメリカの両国の退役軍人が対話を行い、かつての敵である立場から戦争の経験と教訓を共有し、戦争の遺産について話し合い、長期的な平和と両国間の友情を築くための継続的な努力をどのように支援するかを検討しました。HPDFによって提案された「戦争証跡博物館」の名称を「戦争証跡と平和博物館」に変え、その今後の使命を強調するという議案は注目に値するものでした。

この一連のイベントが導いた結論については3月22日に開催された会合で協議され、和解と開発のための基金とHPDFのメンバーである民間の平和活動が登壇しました。

上記の報告書を送付したHPDF会長のパーソナルアシスタントであるファン・ティ・ホン・フ（Pham Thi Hong Phuc）に感謝します。

（翻訳：山本 桃子）

カンボジアドキュメンテーション センターの展示と平和の旅

カンボジア・ドキュメンテーション・センター（DC-Cam）の Youk Chhang 館長は、最近の仕事について重要な情報を私たちに送ってきました。センターは、平和と和解を促進し、将来の集団虐殺を防ぐために1995年に設立されました。1つのプロジェクトは

「物語を変える：カンボジアの平和の旅」というものです。それはクメール・ルージュ（1975-1979）の残虐で大量殺戮的な体制の下で苦しんでいた AnlongVeng の村人だけでなく、避難、飢餓、家族からの離脱で苦しみ、汚名を着せられた地位の低いクメール・ルージュのインタビューをした教育実習生が関わっています。そのような証人の話は、生徒たち（クメール・ルージュの子どもたちもいる）に自分の国の最近の厄介な歴史を理解させ、また、生存者が彼らの話を伝え、それによってエンパワメントの感覚を得る機会を与えています。インタビューを行い、主要サイトの映像を撮影する前に、4人のグループで動く教育実習生は、視聴覚機器の使用について訓練され、映画の主要なテーマと質問を特定するようにしました。記憶、和解、平和に関するプロジェクトの優れた 12 分間のビデオは、[here](#) をクリックすると見ることができます。

このセンターは最近、1950 年代から 1970 年代後半にかけて、今まで知られていなかった重要な文書のコレクションを受け取りました。それはクメール共和国（1970-1975）で今は存在しない組織である「被抑圧民族闘争統一戦線（FULRO）」に中心的に関わっていたチャム族の故レ・コセム（Les Kosem）大佐に関するものでした。

このグループは、カンボジアのチャム・イスラム教徒とヒンズー教徒、現

代ベトナムの南部に住むクメール人、モンタニヤードの丘の人々のために、より大きな自治を求めました。未亡人である Meidine natchear によって 40 年以上にわたって慎重に保管された貴重なアーカイブは彼女によって寄贈されました。このセンターでこれまでに受け取った中で最大の個人アーカイブです。[ここをクリックしてください](#)。寄付についてのフォトギャラリーは [ここ](#) で見ることができます。新しいモノグラフ、虐殺博物館の歴史（1980～2018 年）は [ここ](#) で見ることができます。



Youk Chhang の SRI の構想。Zaha Hadid のデザインによる。（画像：MIR / Norway 2014）

2008 年、カンボジア教育省はセンターにプノンペンの土地を与え、そこに恒久的な研究機関が Sleuk Rith 研究所（SRI）という名前で建設されることになりました。それは、記憶博物館、図書館、劇場を取り入れてセンターの本来の機能を拡張し、大量虐殺研究、人権、国際法のコースを提供する予定です。研究所のバーチャル・ツアーは、「美しさに息を呑むような記念的かつ刺激的な学習と熟考の場所」になるでしょう。[ここ](#) をご覧下さい。資金調達が確

保された後、建物の建設が始まります。ロンドンの Zaha Hadid Architects がこの研究所と虐殺記念館を設計しました。デザインの発表は 2014 年 4 月、ザハハデイド ギャラリーで行われました。SRI の創設者で館長の Youk Chhang 氏は、*Time* magazine が 2007 年に世界で最も影響力のある 100 人の一人に選出されました。

(翻訳：山根和代)

ピースマスクプロジェクト、 カンボジアへ

4 月下旬から 2018 年 5 月の 10 日間、ピースマスクプロジェクトの創設者、キム・ミョンヒ (Myong Hee Kim) 氏とキヤ・キム代表が、カンボジアに拠点を置く NGO 女性平和メーカーズ (WPM) との共同作業のためにプノンペンに招かれました。Peace Mask Project は、日本財団とドイツ開発基金 (GIZ) からの資金援助を得て、Sleuk Rith ギャラリーで 2 回のワークショップ (プライベートとパブリック) を開催しました。Youk Chang 研究所や虐殺記念館については、上記をご覧ください。そこで様々な背景を持つ 15 人のカンボジア人のピースマスクを作りました。



ピースマスクを作る ミョン・ヒ・キム氏。
プノンペン Sleuk Rith ギャラリーにて

ピースマスクのモデルになったメンバーの中には、クメール系、先住民族、チャム族、中国系、ベトナム系の 12 人の若いカンボジア人がいました。Facilitative Listening Design (FLD) と呼ばれる WPM 主導のプロセスを終えたばかりでした。そこでは他者の言うことに耳を傾け、共感を抱くような練習をしました。そのようなことを通して、彼らはピースマスクを作ってもらいながら自分自身を見つめる瞑想的な空間を与えられました。彼らはピースマスクのワークショップに招待されたのでした。彼らはカンボジアの 3 人の指導者、Arn Chorn Pond ([カンボジアの生活芸術](#)の創始者)、Suyheang Kry ([女性平和メーカーズ](#)の代表)、Nika Tath (マッサージ療法の創始者) も参加し、彼らもピースマスクを作ってもらいました。ピースマスクの紛争変換プロセスの重要な部分として、マスクを作成したすべての人の間で議論が行われました。

10 日間の共同作業後、5 月 4 日にプノンペンのメタハウスで展示会を開催しました。このプロジェクトとそのメンバーに関する無料の PDF 出版物を [ここから](#) ダウンロードできます。

プノンペンポストに掲載されたイベントに関する記事を読むには、[ここ](#)をクリックして下さい。韓国、台湾、米国のヒバクシャをはじめ、4 世代の広島・長崎の原爆被爆者 100 人のピースマスクを作った特別企画「ピースマスクプロジェクト」は、平和のための博物館の海外での招待を歓迎し、将来の展示会にはいつでも参加できます。



ピースマスク製作のワークショップに続き、討論を担当するキム・キヤ (Kya Kim) さん
(翻訳：山根和代)

100 年間の平和への取り組み： デイトン国際平和博物館(アメリカ)

デイトン国際平和博物館の最も新しい展示会「クエーカー教徒とアメリ

カ・フレンズ奉仕団を記念して：100 年間の平和への取り組み」は 5 月 7 日に始まりました。本展示会は、第一次世界大戦中、良心的兵役拒否者たちの兵役に代わる案を探る緊急な必要性に応じて、1917 年にフィラデルフィアで設立されたことを記念しています。彼らは、戦争被害者の社会復帰と奉仕に関連させて、初めのうちはフランスだけで行われていました。第一次世界大戦の終結後、アメリカ・フレンズ奉仕団（以下 AFSC）は、他の戦争により破壊され荒廃した土地（オーストリア、ドイツ、セルビア、ポーランド、ロシアを含む）でも、貧困にあえぐ子供たちや、難民支援、保健衛生の分野等で活発に支援を行いました。AFSC は、第二次世界大戦の前後も活動を継続し更に発展させて、現在に至ります。第二次世界大戦中、米国における日系アメリカ人の収容に反対した、数少ない市民団体の一つでした。1950 年代と 60 年代の公民権闘争にも、AFSC は深く関わりました。1947 年、AFSC と英国の協力団体（イギリス・フレンズ協議会）は、ノーベル平和賞を受賞しました。それはまた、17 世紀半ば英国での設立以来クエーカー教徒（クエーカーイズム）の根底にある、戦争と社会的な不平等に対する平和と非暴力の抵抗運動の活動が認められたということでもありました。



アメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）のロゴ

昨年、まずフィラデルフィア・アメリカ系アメリカ人博物館で展示された移動展示会は、抑圧を乗り越え、暴力を防ぎ、正義を構築するための非暴力の有効性を、これまで不平等に立ち向かってきた人の数々の力強い実話とともに説明しています。この展示会は、それらのすばらしい活動を称えとともに、不平等に直面した時、これらの活動に関わるよう、今日の人々を勇気づける内容となっています。詳細は以下へアクセスしてください。

<https://www.peoplesworld.org/article/this-week-in-history-american-friends-service-committee-celebrates-centennial/>

(翻訳：山本美穂子)

テヘラン平和博物館

テヘラン平和博物館国際関係担当
エラヘ・プーヤンデー

テヘラン平和博物館（TPM）は 2017 年後半と 2018 年前半にいくつかの国際

プロジェクトを実施しました。TPM からの代表が、11 月 27 日から 12 月 1 日までハーグで開催された第 22 回化学兵器禁止条約（CWC）締約国会議に出席し、いくつかのプログラムを運営しました。その中には CWC 連合のオープンフォーラムでの、「アーモンドの香り」と題した絵画展示、「燃える皮膚」という題のドキュメンタリー映画の上映、TPM の活動に関するプレゼンテーションもありました。

世界フォーラムでの展示は 18 の芸術作品から成っていました。その作品は 100 人以上のイラン人の若い芸術家たちが参加した作品コンテストの後に選ばれたものでした。そのテーマはイラン・イラク戦争での化学兵器の使用で、化学兵器禁止、意識を高めるための生存者の役割、そして彼らの平和のための努力に焦点を当てていました。「アーモンドの香り」という展示の題は、マスタードガスに曝された後で、犠牲者は様々な臭いを感じたという事実を表しています。その臭いの中にはビターアーモンドの臭いもあったのです。悪いイメージを与える形容詞を省いて、その題は未来の平和な展望も伝えようとしています。

TPM 館長モハマドレザ・タギプア氏は、テヘラン市会議員アーマッド・マスジェッド・ジャメイと審査員一名から最優秀博物館賞を授与されました。

TPM を訪問したゲストと外国からの高位高官の中にはオーストリアとオー

オーストラリアのイラン駐在大使、アメリカの映画監督オリバー・ストーン、国際博物館会議（ICOM）の博物館学国際委員会の会長フランソワ・メレスもおられました。



Ahmad Masjed Jamei (テヘラン市議会議員)より
博物館優秀賞を受け取る Mohammadreza
Taghipour (新館長)

1月にTPMからのボランティアが広島市の平和市長会議の事務局で研修生として働きました。5月には第11回イラン最優秀博物館選定会議が国際博物館の日と文化遺産週間に芸術家フォーラムで開催されました。

その会議は、非常につながりの深い博物館、つまり新しい働きかけ、新しい一般大衆を国際的なモットーとしていました。

この式典では、TPMは「教育」の基準に関して私立博物館の部で最優秀として選定されました。5年目続けて、TPMは一つのカテゴリーの中で最優秀の私立博物館としての名誉を得たのです。これはこの博物館の職員とボランティアの専門家としての知見と献身への賛辞と言えるでしょう。



ハーグでの「アーモンドの香り展」を訪れている新任の化学兵器禁止機関事務局長であるフェルナンド・アリアス氏

(翻訳：赤松敦子)

ゲルニカ平和博物館 20周年

スペインのバスクにあるゲルニカ平和博物館は今年20周年を迎えます。その祝賀行事を機会として、大規模な常設展示の見直しを行っているところです。ゲルニカの街の爆撃と、あの衝撃的な出来事に伴う歴史的な記憶により焦点をあてる予定です。新しい展示では平和と人権についての展示物はこれまでの展示ほど目立つものではなくなる予定です。一方で、ゲルニカ博物館は平和と人権に関するオンラインコースを準備しています。その一つのセクションは平和博物館について捧げられる予定です。20周年記念の祝賀行事の一部として、当博物館はスペイン内戦に関連する様々な旧跡や慰霊碑を巡る3つの「記憶の旅」を計画しています。その旅では3つの違う地方を、ジーザス・アロンゾ・カルヴァレス教授の案内で巡ります。

その他の特別な活動の中には、「公共の場での芸術と記憶」、博物館での映画上映、博物館での音楽演奏、「平和を創る人々」特別展示（2018年9月21日から2019年3月17日まで）などの展示、会議、セミナー、ワークショップがあります。特別展示は32人の勇気ある、感動を与える人々を取り上げています。この人々は、人権に敬意が払われもっと平和で公平な世界を創るために努力しているのです。同時期に、もう一つの特別展示が開催されます。

「芸術は弾丸を止めることができるのか？」と題されたこの展示はアメリカ合衆国出身のオーストラリアの芸術家で平和主義者であるウィリアム・ケリーによるものです。ゴヤの「戦争の災害」とピカソの「ゲルニカ」の伝統に習って、私たちに芸術家の社会変革に対する責任について考えさせてくれます。ケリーは、芸術は心や頭脳を変化させる手助けとなり、その変化の時に弾丸が発射されるのを止める手助けをすることができるかと固く信じています。



(翻訳：赤松敦子)

テヘラン平和博物館とゲルニカ 平和博物館でのボランティア活動

モナ・バダメチザデ

私は博物館学専攻の院生でテヘラン平和博物館 (TPM) で4年間のボランティアを経験し、次にゲルニカ平和博物館で2月1日から4月末まで実習生として勤務しました。

これら2つの博物館は同じ目的を持っていますが、私の経験は両方ともとても異なっており、大変貴重なものでした。TPMでは私は平和博物館の概念とその設立の理由について学びました。

常設展示のおかげで私は、イラン・イラク戦争で使用された化学兵器の影響について学ぶことができました。私は、この博物館を訪問するまでこのことについてはっきりとは理解できていませんでした。TPMで開催された様々な種類のワークショップを通して、様々な形の平和、平和の文化、平和教育、平和のための芸術について知識を得ました。平和の理論上の定義について学びつつ、TPMの多くのボランティアの方々や、博物館案内役の方々と一緒に仕事をする機会がありました。案内役の方々は化学兵器による戦争を経験された傷跡を抱えておられました。

TPM での私の仕事のほとんどは平和のための芸術と平和教育にありました。私たちは子どもたちのためにワークショップを開きました。積極的な平和に基本を置いているものがほとんどで様々なタイプの芸術家による芸術作品が展示されました。

私にとっては、GPM は、私が平和の様々な概念について学んできたことを、その常設展示の中で絵画や音、色、そして文章を通して描写していたという印象です。その博物館のシナリオがダイナミックだったので、私は社会の中に平和があるときとないとき、それぞれの間になんかことが起こるのかを目撃したという感じがしました。スペイン語のとても基本的な知識があるだけでバスク語の知識はほとんどなくても博物館全体を見て回る機会がありました。

職員の方に助けていただいて、私は受付、ミュージアムショップ、平和教育課で働きました。皆さんの援助のおかげで、英語で館内案内をすることができるようになりました。学校から来られた児童のみなさんが博物館の中や外で参加するワークショップを参観させていただいて、私はとても学ぶことが多く、強く刺激を受けました。それで、実習期間に博物館の館長さんと平和教育課の職員の方のご指導により、爆撃についてのワークショ

ップの計画を立てさせていただきました。

これら2つの博物館のおかげで、私は学び経験する貴重な機会を得ることができました。そのため、私は平和への道を歩くために博物館での仕事を選ぶということに、より強く確信を持つことができました。現在は、私は平和博物館で経験したことについての論文に取り組んでいます。

今後、私は世界中にあるその他の平和博物館で勤務する機会を探したいと思っています。合同プロジェクトを始めたり、常設展や特別展示の開発も研究したりしたいと思います。



ゲルニカ平和博物館の同僚の数人と共に。筆者は左から二人目。（館長イラツェ・モモイシヨは一番右側）左から3人目は、モーナ・バダミシザデでボランティア参加。ゲルニカ・ゴゴラツ平和研究所の所長マリア・オラングレンと。

（翻訳：赤松敦子）

平和のフロンティア (フロンテイラ・デ・パズ) 博物館

2017年8月、アルメイダ近郊にあるポルトガル北東部の村ヴィラル・フォルモーゾに新しい博物館が開館しました。スペインとの国境近くに建つその博物館は「フロンテイラ・デ・パズ（平和のフロンティア）博物館」と呼ばれ、1940年初期この土地に歓迎されたナチスからの避難民のため、そして、フランスのボルドーにあるポルトガル領事館で多くの避難民を救った英雄アリスティデス・デ・ソウザ・メンデスのために設立されました。

表向きには中立的な立場をとっているながらも、裏ではヒトラーを支持し、アントニオ・デ・オリヴェイラ・サラザールの独裁政権下にあったポルトガルは、難民を救済する場所とならないよう全ての外交官に命令とも取れる指示を下していました。そのため、難民へのビザ発行ができなくなり、彼らがフランスを逃れ、安全なスペイン経由のルートを通してポルトガルに入国し、滞在や旅をすることができなくなりました。

しかし、デ・ソウザ・メンデスは、自身の命を危険にさらすことになろうとも、国の命令を無視し、代わりに彼自身の良心とカトリックの信念に従うことを決意します。1940年6月のある多忙な一週間のうちに、二人の息子の

協力を得ながら、ヨーロッパ中の30,000人もの避難民（うち10,000人のユダヤ人を含む）にビザを発行しました。

この英雄的な功績は「ホロコーストにおける個人が成し遂げた最大の救助活動」として知られています。同月末、彼はリスボンに呼び出され職を失いました。さらなる処罰として、彼は年金を没収され（30年もの外交官職員を務めた後に）、生活費を稼ぐことも許されませんでした。彼の家族もまた差別に苦しむこととなりました。そして、彼は、1954年、貧困の中、政府によって受けた汚名を背負いながら亡くなりました。

軍事的独裁政治が終了した後、ポルトガルは、「反抗的な外交官」と批判されたメンデスと彼の家族に対し、正式な謝罪を行いました。ポルトガルの議会は、彼の死後、外交官としての彼の地位を格上げし、他国（アメリカとイスラエルを含む）から彼は称賛を受けました。

彼の物語は、リトアニアのカウナスで日本の外交官を務めた杉原千畝と共通する部分が多くあります（2015年8月発行INMPニュースレター12号12ページを参照）。

アルメイダ地方自治体は2012年に博物館の建設に取り組み始めました。この博物館は、2つの分館内に6つのテーマに分かれた展示室で構成されています。

デ・ソウザ・メンデスの家族や避難民の生存者による立会いのもと、ポルトガルの大統領マルセロ・レベロ・デ・ソウザによって開館されました。

その避難民の中には、ブランシェット・フラーも出席しており、彼女の家族の歴史を博物館の展示から知ることができます。



アリスティデス・デ・ソウザ・メンデス
(1885-1954)

今年の初めに掲載された「ガーディアン」の追悼記事から、彼女の物語を読むことができます。

<https://www.theguardian.com/world/2018/jan/21/blanchette-fluer-obituary>

博物館とアリスティデス・デ・ソウザ・メンデスについてもっと情報が知りたい場合は、下記のページをご参照ください。フォトギャラリーもご覧いただけます。

<http://www.centerofportugal.com/vilar-formoso-the-peace-frontier/>

<http://www.centerofportugal.com/aristides-de-sousa-mendes-the->

[insubordinate-consul/](http://www.centerofportugal.com/aristides-de-sousa-mendes-the-)

<http://sousamendesfoundation.org/aristides-de-sousa-mendes-his-life-and-legacy/>

(翻訳：狩俣英美)

ロスアラモス展報告

田中勝：現代美術家
京都造形芸術大学
文明哲学研究所 准教授

2017年3月に、世界で初の原爆開発・製造が行われた米国ロスアラモスにて、ドキュメンタリー映画『ノーモア広島ノーモア長崎』上映会と「平和の新世紀」プロジェクト 2017in ロスアラモス 田中勝&ベッツィ・ミラー・キューズ新作展を、ロスアラモス歴史博物館の主催にて開催することが出来ました。

「平和の新世紀」プロジェクトとは、アメリカ・ロスアラモス出身の画家ベッツィ・ミラー・キューズと、現代美術・映像作家である私、田中勝による共同作品制作です。ベッツィ・ミラー・キューズの父親は、1945年の当時、原子爆弾製造のマンハッタン計画に携わった物理学者であり、父は広島に被爆しました。

私とベッツィ・ミラー・キュウズは、1999年より共同作品制作をスタートさせ、国内外の教育機関、美術館等にて作品展や講演会、ワークショップ等を多数開催してきました。2009年には、ニューヨーク国連本部での企画で作品展示の機会を得てきました。

『ノーモア広島ノーモア長崎』は、2005年に、カナダのテレビ局によって制作されたドキュメンタリー映画です。映画には、広島、長崎の被爆者の方々と共に、ベッツィ・ミラー・キュウズと、私と父が出演しています。この映画は、2007年にDOXAドキュメンタリー映画祭にて最高賞を受賞しました。

上映会と作品展会場となったフラワー・ロジ・アート・センターは、マンハッタン計画が行われる以前からロスアラモスの文化の中心施設でした。現在、敷地内には、ギャラリー・スペースや歴史博物館などがあり、アート・センター前には、原子爆弾製造のマンハッタン計画の科学の責任者であったロバート・オッペンハイマー博士と、マンハッタン計画の軍の責任者であったレズリー・グローヴズ少将の銅像が立っています。このマンハッタン計画が行われた場所は、現在、ロスアラモス国立研究所となり、約1万1000人に人が働いています。また、町には、「Atomic City」との旗や看板、グッズがたくさんあり、原爆開発が栄光の歴史

として語られ、キノコ雲の下の出来事は語られていません。

上映会は満席となり、市民との対話の場にもなりました。また、ロスアラモスでは、サポーターとして同行した広島平和記念資料館ピースボランティア・メンバーと、ロスアラモス歴史博物館ボランティア・メンバーとの対話の集い（非公式）をロスアラモス歴史博物館のジュディス・スタウバー館長の提案で実施することができました。このジュディス・スタウバー館長は、その年の8月6日に広島を訪問し平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に参列しました。それは、ロスアラモスの公的機関から初の参列となりました。

ジュディス・スタウバー博士は、次のように語っています。"Museums should be places to open minds and hearts."（博物館は人心を開く場所でなければなりません。）と。



左から、アーティストの田中勝とベッツィ・ミラー・キュウズ、ジュディス・スタウバー（ロスアラモス歴史博物館館長）

<注>

(1)現在、ロスアラモス歴史博物館で展示されているのは、J・ロバート・オッペンハイマ

ー：人生の写真(1904-1967)です。5月2日から8月まで開催、ロスアラモスのオープンハイマー記念委員会によるもので、50ほどの白黒写真を見ることができます。

(2)4月初めにロスアラモス歴史博物館から、意見の違いが克服されるまでは、広島平和記念資料館や長崎原爆資料館による巡回展は催さないという連絡がありました。博物館の事務局長、ヘザー・マクレナハンによると、原爆廃絶のための展示には違和感があるとのこと。ここは、以前のアメリカ核兵器研究機関の一つ、ロスアラモス国立研究所の拠点だからということです。

<https://apnews.com/7c9581fcabb34b8c8957a1ebdcf9ff42>



フラー・ロッジ・アート・センター (ロスアラモス、ニューメキシコ州)

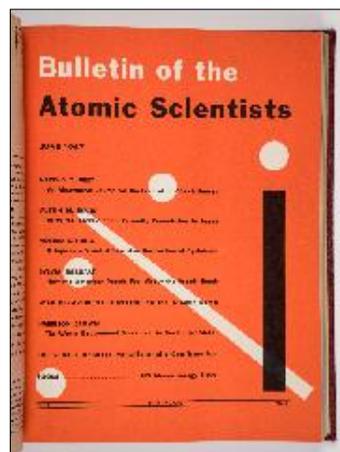
(翻訳：寺沢京子)

「時計の針を戻そう」展示会 (シカゴ科学産業博物館)

「時計の針を戻そう」という新しい展示が、シカゴの科学産業博物館で催されています。「原子力科学者会報」の終末時計に鑑みて、歴史を探求する展示です。終末時計は現代における重要なシンボルです。シカゴ大学拠点の「会報」と協力して、有名な時計の70

周年記念が催されているのです。この70年間、時計がどのように展開されてきたのか、また、核戦争だけでなく気候変動も差し迫った危機として示されています。来場者は、個人の話や相互メディア、人工物など様々な方法を通して学ぶことができます。劇的な外交・政治の努力によって、時計の針が進められたり戻されたりしてきた歴史を学べるのです。科学者や世界の指導者たちの決断や粘り強さが、重要な国際交渉や合意、核兵器削減、政策変更をいかに導いてきたのかを知ることができます。この展示は5月26日に開かれ、2018年初めまで続けられます。さらなる情報は、このサイトで知ることができます。

<https://www.msichicago.org/press/exhibits-and-events/turn-back-the-clock/>



終末時計が初めて現れたのは1947年6月
J.B. スペクター、シカゴ科学産業博物館蔵

シカゴのワインバーグ／ニュートンギャラリーでは、5月11～19日に「真夜中まであと2分」という展示がありま

した。そこでは、終末時計のデザイナー、故マーティル・ラングスドルフに敬意を表して、バーチャル・リアリティー体験ができました。「アートと終末時計のデザイン」という夕刻の語り合いも、5月15日に同じ場で行なわれました。

(翻訳：寺沢京子)



ドーバーの白い崖での CND シンボル
(ケント州)

CND の、これまで以上の旅 イギリス平和のシンボル

CND(英国の核兵器廃絶キャンペーン)60周年記念の一環として、有名なシンボル(国際的に認められている平和の印)の旅が行なわれています。

大きな三次元のシンボル(C, N, Dの文字とロゴの4部分から成っている)が、ウェールズとスコットランド含むイギリスの各地を訪れるのです。



Reigate Priory 公園 (Surrey) の
CND シンボル

ドーバーの白い崖、ファスレーン海軍基地(イギリスの核兵器基地)、ストーンヘンジなどの有名な場へ赴きます。ツアーは2月に始まり、今までに15か所ほどに行きました。それぞれの地への設置や関連イベントや広報は、主に地域のCNDグループが担当しました。町の中心広場や公園、浜辺、橋の近く、教会などに設置されてきました。印象的に設置し、幅広い年齢層の人々の関心を引き寄せて、議論の機会を提供します。人々の意識を高めて、核兵器廃絶の必要性を「これまで以上に」感じてもらうためです。この旅の素晴らしいイラスト付の報告は、このサイトで見るすることができます。

<https://www.msichicago.org/press/exhibits-and-events/turn-back-the-clock/>

(翻訳：寺沢京子)

<https://www.np-coburg.de/region/coburg/Lebenswerk-von-Pfarrer-Sperl;art83420,6183323>

<https://www.sonntagsblatt.de/artikel/bayern/vision-weltfrieden-die-pazifistin-anna-b-eckstein>

ドイツ「平和の地図」

メーダー平和博物館（前記事を参照）は、地方テレビ局などのメディア・パートナーの協力を得て、「平和の地図（*Landkarte des Friedens*）」というユニークで美しいマルチメディアの地図を開発しました。

「平和の地図」上には、平和について語る上で重要な場所にフラッグが立っています。過去から現在にかけて、その地域で起きた平和を語るための物語を、地図上のフラッグが目印となって示しています。

いくつかの物語は、ニュルンベルクやメーダーにある平和博物館に関するもの、あるいは博物館自体の物語となっています。その他は、30年戦争（1618年～48年）で平和のために貢献した女性たちの物語や、戦争と平和における教会の多様な役割について、そして良心的兵役拒否者への待遇などについてです。

それぞれの場所の外観と物語が、美しい映像と音声、そして多くの情報と

真実を語ったインタビューを含む6分間のビデオに収められています。

この魅力的な平和教育プロジェクトは、歴史や地図の持つ情報が伝統的に戦争や紛争に偏っていた流れを変えるための新しい見方を提供することで、平和活動の隠された歴史を明らかにすること、平和と反戦に関わる場所を提示することを目指しています。

他の平和博物館にも、その土地の平和の地図を作っていたいただきたいと思います。「平和の地図」はこちらから閲覧できます。

www.Friedenslandkarte.de

読者のみなさんは、もしかするとこの地図と関連しつつも異なった内容の地図、つまり世界の軍事力についての地図に関心があるかもしれません。World BEYOND War というサイトからその地図を見ることができます。

<http://bit.ly/mappingmilitarism>

（翻訳：狩俣英美）

レマーゲンの橋平和博物館 （ドイツ）

レマーゲンの橋平和博物館を所有・運営している組合は、4月の臨時総会において、地方自治体に博物館を譲り、組合を解散するという、同館の創立者であり館長でもあるハンズ・ピーター・クルテン氏の提案を承認しました。

1981年の設立時から、クルテン氏は博物館の着想、建設、管理に携わり、50年近くもの間、全身全霊をかけて活動をしてきました。

90歳に近づき、クルテン氏が体調を崩しがちになったことで、レマーゲン前市長は、博物館の未来のために、地方自治体によって守られた方が良いのではないかという話し合いを持ちかけました。

博物館は、街のシンボルであり、80万人もの観光客を魅了してきました。そのほとんどが第二次世界大戦の終盤にライン川に架かるこの橋を有名にした戦いに従事したアメリカ退役軍人の方々でした。

現市長と市議は、その決断を歓迎し、市であれば博物館を維持するだけではなく、地方の観光政策の中に館を統合させ、利用を促進することで、館をさらに発展させることができると約束しました。

同時に、クルテン氏も指摘するように、レマーゲンで起きた戦争の恐ろしさを目の当たりにした体験を次世代に託すことで、戦争の記憶や調和と平和への働きといった活動に対して、若者に関心を持ってもらうためにはどうすれば良いのか考え直すきっかけになるでしょう。

博物館の未来を守るために、そして、1945年から街の歴史と密に関わり続けてきた素晴らしい施設を街全体で誇り

に思うための決断をした創立者と博物館関係者をINMPは祝福します。

さらに詳しい報告を地元の新聞記事（ドイツ語）で読むことができます。

<http://www.blick-aktuell.de/Berichte/Im-Sinne-des-Gruenders-weiterarbeiten-320147.html>



博物館の柱の前に立つハンズ・ピーター・クルテン氏（橋から落ちた石は、博物館の資金のために売却されました）

（翻訳：狩俣英美）

“シリア・コラテラル”ードイツ、オスナブリュック、エーリヒ・マリア・レマルク平和センターの展示会

4月19日～6月10日まで、オスナブリュックのエーリヒ・マリア・レマルク平和センターは、興味深いシリアの内戦被害者の写真展を開催しました。2011年の春に内戦が始まって以降、100万人以上が負傷しています。2014年～2015年、受賞経験のあるドイツ人写真家カイ・ワイデンホファーは、ヨ

ルダンとレバノンの町や村、難民キャンプで暮らす、内戦で負傷した人々を5ヶ月以上に渡り写真を撮りました。この間、毎週約6,000人のシリア人が内戦による負傷で苦しんでいました。“シリア・コラテラル”と名付けられた本展示会は、40人の顔写真を彼らの悲劇的な道のりとともに展示しています。アレッポやホムスなど、破壊されたシリアの多くの都市を代表して、アレッポ県コバニ市の大きな写真も展示されています。写真家は、内戦直後の真の姿を見せることで、戦争の現実を見せ、人々の認識を高め、助けを求める人々への支援を呼びかけることを目的としています。メディアは、時に死者の数に焦点を当てて一方で、負傷した人々については無視する傾向にあります。しかし傷を負った彼らにとって、戦争が終わることはなく、受けた傷と（身体的な傷に限らず、近い家族や、家や持ち物、暮らしを失う悲しみに向き合い）、一生戦いながら耐えていかなければならないのです。



ベルリンのドイツ外務省での展示会
(撮影：カイ・ヴィーデンホファー)



アマール・ヤスィール、8歳、シェルターを破壊したロケットに、腕と脚半分を切断された
(撮影：カイ・ヴィーデンホファー)

ヴィーデンホファーは指摘する。“これは、一個人が受けた傷が我々に大きな印象を与えるという戦争における矛盾だ。私たちが見ることのできる顔、私たちが実際に思い出すことのできる名前や人生。被害者の数が大きくなるにつれて、私たちは感情的に動かされなくなっていく。戦争に対して、私たちの驚きが大きくなる代わりに、その真実にどこか無感覚になっていく。数というものとは抽象的だ。しかし、人々は違う”。

この展示会は、2016年夏にはベルリンの壁沿いに「戦争と壁」、「40/100万」という題で展示されるなど、ドイツ国内の他の都市でも展示されています。このプロジェクトは、“シリア・コラテラル”という出版や、以下のサイトでショートビデオでも見ることができます。

<http://www.waronwall.org/the-book/>



ジュムナ (6才) とアイード (8歳) と父親；樽爆弾が彼らの家を襲った時、ジュムナは足の下部を、アイードは両足を失った (撮影：カイ・ヴィーデンホファー)

(翻訳：山本美穂子)

ジョージアのタブリシと ハーグのベルタ・フォン・ ズットナーの平和の家

ドイツの女性平和ネットワークのハイデ・シュエッツさんとマルギト・オットさん、そして「転換のための芸術」のジュエルゲン・メンゼルさんは、ジョージアのトビリシの GergArt のメンバーと会いました。彼らは、ベルタ・フォン・ズットナーとその夫が 1876 年にウィーンでの秘密結婚後、コーカサスへ移って生活した最後の 2 年間 (1882-1884) 住んでいた家を見ました。グルジアとドイツの平和活動家は、

この家を改装し、コーカサス地域の平和のため活動しているジョージアの市民団体の平和の家に変えようと人々に訴えるプロジェクトを開始することに同意しました。それと同時に、オーストリア、チェコ、グルジアのズットナーに関連した重要な遺産は、世界の平和に関連した重要な場所と同様に、このように保存され、生命を取り戻すのです。詳しい情報や写真は [こちらを](#)。



ベルタ・フォン・ズットナーの胸像の除幕式での Agon Qosa, Peter van den Dungen, Petra Kepler, Festim Lato

一方、ハーグのベルタ・フォン・ズットナービルへの訪問者は、6月8日ベルタ・フォン・ズットナー平和研究所 (ハーグの INMP メンバー) 主催の「ベルタの友人たち」というセミナーの際に発表された彼女の胸像によって迎えられました。このセミナーでは、彼女に鼓舞された世界中の伝記作家、アーティスト、その他の専門家が集まりました。アートの印象的な作品は、アルバニアの彫刻家 Agon Qosa によって製作され、ベルタ・フォン・ズットナー平和研究所に寄付されました。

そのセミナーは、6月7-10日にズットナーの生誕 175 周年記念を祝う行事（ベルタ・フォン・ズットナー平和研究所による）の一部で、平和宮とオーストリア大使館、そしてヒューマニティハウスとイ・ジュン平和博物館と協力して開催されました。（INMP ニュースレター第 21 号と第 22 号の記事を参照して下さい。）



6月9日 Bertha von Suttner の胸像を公開した Erik de Baedts と Heinz Fischer さん

6月9日には、平和宮でのプログラム中でベルタ・フォン・ズットナーの別の胸像が、元オーストリア大統領のハインツ・フィッシャー博士と、平和宮のディレクターのエリック・デ・バーツ氏によって公開されました。



6月9日、平和宮で手伝うベルタ・フォン・ズットナー平和研究所ボランティア・インターンの Jackie Bonasia（米国）、Xialei Wu（中国）、Evgenia Lukaschuk（ロシア）さん

オランダの彫刻家 Lia Krol 氏による作は、ウィーン平和博物館の創設者で館長である Liska Blodgett 氏に依頼され、展示されました。それは市役所（Rathaus）の小さな平和公園に配置するため、ウィーン市に提供されます。いくつかのイベントのフォトギャラリーについては、[ここをクリックしてください](#)。

バーゼル平和オフィス代表でスピーカーのアラン・ウェア氏によるレポートについては、次の記事をご覧ください。「カザフスタンから若い平和運動家、ベルタ・フォン・ズットナー生誕175周年記念行事に参加する。」[ここをご覧ください](#)。

ベルタ・フォン・ズットナー平和研究所創設者で代表のペトラ・ケプラー（Petra Keppler）さんはこの行事で中心的な役割を果たし、ボランティアと

インターンの国際的なチームの助けを借りて、この記念行事を大成功させました。過去3年間、彼女はボランティアとして、INMP事務局も担当してきました。INMPの理事会の決定に従って、ハーグのINMP事務所は6月の終わりに閉鎖されましたが、ハーグ市に約10年間存在していました。7月1日より、事務所は日本の立命館大学国際平和ミュージアムに移ります。INMPは、過去3年間に、事務所を管理し、INMPへ大きな貢献をされたPetra Kepplerさんに非常に感謝しています。

(翻訳：山根和代)

ヴルチャ平和博物館 (ルーマニア)

ルーマニアのヴルチャ平和博物館の設立者、マグダレナ・クリスティナ・ブトゥッカは、平和博物館設立の主な目的を、高校や大学など学校現場での平和教育を支援することで、若い世代に平和についての情報を広く広報することと報告しました。3月から6月の間には、学校当局の協力を得て当平和博物館館長が実施した平和教育のコースに、ルーマニア国内の700人以上の高校生が参加しました。

このコースに参加したのは、ルムニク・ヴルチャの3つの国立大学からの学生で、彼らのリーダーシップはイニシ

アティブを支えています。平和教育コースの目標は、平和政策の明確化と分析です。平和的な精神で許容範囲を広げること、建設的な紛争解決、地元や地域の問題や衝突の理解と解決のための技術や手段を構築すること、世界的な教育に関連した知識の発展です。平和教育は、社会におけるテロリズムや暴力、強硬的な考えを減らし無くしていく効果的な方法として考えられています。

(翻訳：山本美穂子)

第五福竜丸アニメーション映画

東京の第五福竜丸展示館は、1954年3月1日にアメリカ合衆国による太平洋上のビキニ環礁での水爆実験で被曝したマグロ延縄漁船を保存しています。23人の乗組員は人類によって引き起こされた最大の爆発を目撃したのです。キャッスル・ブラボーが大気中での一連の6回の熱核爆発の最初でした。その爆発はオペレーション・ブラボーと呼ばれ、5か月の間準備され、その爆発は核実験の中で最も環境をひどく破壊することになりました。世界への影響は今日でもまだ続いています。マーシャル諸島の住民は自宅があったロンゲラップ環礁やビキニ環礁から強制退去させられ、今でも帰ることはできません。人間の生活は影響を受け続けています。特に核実験による放射性降下

物に影響を受けた漁師たちは影響を受け続けています。

生き残った漁師たちのうち3人は2014年に取材を受け、それ以来彼らの話を元に「西から日が昇る日」というタイトルのアニメーション映画が製作されてきました。そのタイトルは、彼らが空に見た恐ろしく大きな火の玉の事を表しています。その映画は「紙芝居」の形式をとっており、監督はドキュメンタリー映画を中心に製作しているダリボルカという映画会社の所有者であるキース・レイミンクです。



映画のポスター

アメリカ合衆国と日本の両方のスタッフがいるレイミンクの製作チームと一緒に、その映画は様々な教育関係の団体関係の支援を受けました。その団体の中には、全国アジア教育協会（NCTA）も含まれていました。その映画の世界最初の試写会を（ダリボルカ映画会社の本社がある）ピッツバー

グで今年後半に行うことが計画されています。また、この映画は映画祭に参加する予定です。2019年3月の、キャッスル・ブラボーと第五福竜丸被曝の65年目の日に、日本でこの映画を上映する計画もあります。詳細については、以下のサイトでオンライン版メディア向け紹介をご覧ください。

www.daliborkafilms.com

または、keithsreimink@gmail.comまでご連絡ください。

（翻訳：赤松敦子）

北朝鮮との平和

北朝鮮に関するアメリカ合衆国大統領ドナルド・トランプのけんか腰の発言に続いて、2月には日系アメリカ人の芸術家で平和活動家であるカズアキ・タナハシがアメリカの友人の協力の元に www.NoWarWithNorthKorea.org というウェブサイトを開設しました。

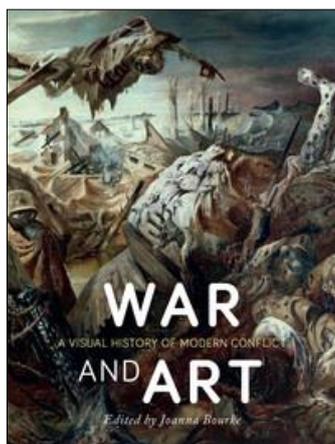


そのサイトでは北朝鮮に関する問題や様々な行動計画について包括的な情報を得ることができます。その行動計画の中には国会議員やメディアに手紙を書くことや、一般大衆に訴える掲示板やバンパーに貼るステッカーやポスタ

一のデザインも含まれています。アメリカ合衆国で100以上の平和関係の団体と仕事をして、彼らはアメリカ合衆国の世論を方向転換し、戦争を避け、平和的な外交努力による解決策を求める世論の総意を創造するために努力を続けています。

(翻訳：赤松敦子)

新刊書



戦争史家ジョアンナ・バーク編「戦争と芸術：現代の紛争の視覚的な歴史（ロンドン、リークシオン出版、2017年：London: Reaktion Books, 2017）、392ページ）」は、芸術の面で武力衝突が、視覚的、文化的、そして歴史的な評価を包括的に捉えた大作です。過去二世紀のイラストを多用した（カラーのイラスト400種を含む）本著は、戦争や戦争の終結の描写が、英雄的な描写から、より真実味を帯びた描写へ、どのように変わったかを網羅しています。

章は、反戦芸術家のオットー・ディクス、ケーテ・コロヴィッツ、ワヴァシーリー・ヴェレシチャーギンによって書かれています。最終章は“反戦の芸術”とされています。编者による紹介と目次は、以下から読むことができ、ダウンロードも可能です。

<http://reaktionbooks.co.uk/pdfs/war-and-art-intro-V2.pdf>

写真：著書の表紙は以下から見る事ができます。

<http://www.reaktionbooks.co.uk/display.asp?ISBN=9781780238463>

(翻訳：山本美穂子)

INMP 新事務所、京都へ

2008年10月1日以来、INMPのオフィスはオランダのハーグにありました。過去数年にわたり執行委員および諮問委員の議論の結果、財政問題を含むいくつかの理由により、INMPが立命館大学国際平和ミュージアムに移転することが最終的に決定されました。INMPメンバーである国際平和ミュージアムは、1998年と2008年に第3回と第6回国際平和博物館会議を開催し、2020年に第10回国際会議を予定しています。この博物館の名誉館長の安齋育郎教授は、INMPの新しいコーディネーターに選出されました。現在事務所の移転手続きが進められていますので、次の号で新事務所に関する情報をお知らせする予定です。



国際平和ミュージアムにある INMP 新オフィス前で安齋育郎、ペトラ・ケブラー、山根和代



編集者より

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安齋育郎、ロバート・コワルチェック、キヤ・キムによって編集されました。

今回からキヤ・キムさんが加わりました。京都教育大学などで国際関係学非常勤講師、ピースマスクプロジェクトの代表をされています。



また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、狩俣英美さん、寺沢京子さん、山本美穂子さん、山本桃子さん、山根和代がボランティアで担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。以前発行された通信は INMP のウェブサイトで読むことができます。<https://www.inmp.net/>

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。inmpoffice@gmail.com

2018 年 9 月に発行される次号に投稿したい方は、8 月 15 日までに原稿をお願いします(500 語以内、写真 1-2 枚)。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

inmpoffice@gmail.com